



岐阜大学機関リポジトリ

Gifu University Institutional Repository

乳幼児突然死症候群における肺臓での換気障害に関する病理組織学・超微形態学的研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-03-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大谷, 勲 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12099/134

はしがき

乳児突然死症候群(SIDS)については種々の病理形態学的、生理学的な研究が行われている。それらの結果、剖検時SIDSの可能性が高いと考えられた事例の中にはウイルス感染や代謝異常が原因で死亡したと考えられる例が存在するという報告もみられるようになった。しかし、大部分の事例では未だに死亡の原因が解明されていない。

SIDSにおける死に至る機序としては臨床的には睡眠中の遷延性無呼吸が注目されており、病理学的な観察では脳幹部の小グリア結節等呼吸障害が存在していた可能性を示唆する所見が報告されている。また、肺でも細気管支上皮内の神経内分泌細胞(pulmonary neuroendocrine cells)の残余が低酸素状態に伴われる変化として注目されている。しかし、この呼吸障害の原因や機序については不明な点が多い。

ところで、SIDSの事例には肺胸腔のみならず肺胞壁にも強い浮腫を伴う事例があり、この所見はSIDSの症例では何らかの原因により肺浮腫が発生し、よって、換気障害に陥っている可能性を示唆するものと考えられる。しかし、肺水腫の程度が他の外因死例に比べて有意に強いか否かは電子顕微鏡を用いた形態学的・定量学的方法を用いて初めて可能になると思われる。

したがって、本研究ではSIDS症例での肺の変化を病理組織学的に検討するとともに、電子顕微鏡を用いて肺浮腫等の程度を、外因による急死事例を対照として、定量学的に検討し、あわせて、これらの変化による換気障害の程度やその死因への関与について検討し、SIDSの原因について考究した。